



伊那街道の中継拠点として

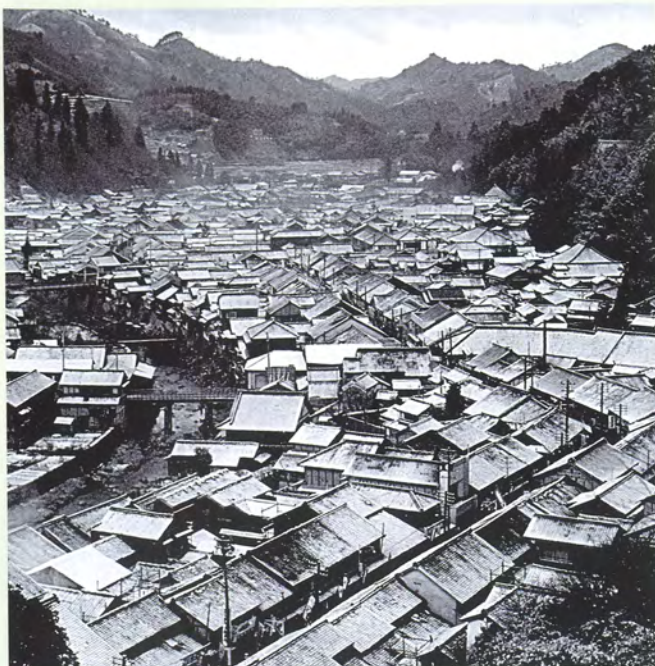
栄えた商家の町並み

足助

あすけ

重要伝統的建造物群保存地区

町並み散策ナビ



●観音山から見た町並み（昭和初期）

足助の町並みの歴史

足助の町並みは、尾張・三河から信州を結ぶ伊那街道（中馬街道）の重要な中継地にあたり、物資運搬や庶民通行の要所として栄えた商家町です。重要な交易物であった塩はここで詰め替えられ、「足助塩」「足助直し」と呼ばれました。町並みの成立は定かではありませんが、安永4年（1775）の大火で町並みの大部分は焼失してしまいました。大火直後から町は再建され、今も町並みには江戸時代後期から明治末までに建てられた建物が数多く残っています。大正期や戦後の建物でも伝統的な町家の形式を踏襲するものが多く、現在まで古い町並みの景観が保たれてきました。

明治44年（1911）に国鉄中央線が開通すると、物資の輸送基地としての機能は次第に衰退しますが、その後も足助は東加茂郡の中心として歩み続けました。



●連続する妻入家屋

足助の町家建築の特徴

安永4年（1775）の大火後に復興された町並みは、漆喰塗り2階建ての町家で、防火を意識した瓦葺きが普及し、屋根勾配が比較的急になっています。1階には庇を設け、部戸の痕跡を残す家が多く、商家町の特徴を示しています。



敷地利用と家並みの特徴

足助の町並みは、南北を山で挟まれた足助川の谷筋に沿う段丘上に広がっています。街道沿いでは、短冊状の敷地に主屋を間口いっぱい建て、その背後に離れ座敷や土蔵などが密に配置されています。限られた敷地に用地を確保するために、建物は切土や盛土による造成地や幾段にも築かれた石垣の上に建てられ、特徴的な景観をつくり出しています。



アクセス

公共交通機関

- ◎名鉄三河線豊田市駅より
名鉄バス足助行き約45分 香風溪下車
- ◎名鉄豊田線浄水駅より
とよたおいでんバス百年草行き約60分 香風溪下車
- ◎名鉄名古屋本線東岡崎駅より
名鉄バス足助行き約60分 香風溪下車

車

- ◎東海環状自動車道豊田助八 IC より
国道153号足助方面に約15km
- ◎猿投グリーンロード力石 IC より
国道153号足助方面に約9km



お願い

「足助の町並み散歩ナビ」は、足助の歴史的町並みの魅力を多くの方に知っていただくためのものです。足助の一般観光情報につきましては、足助観光協会発行の「香風溪・町並み散策地図」をご参照ください。

地図に掲載している個人住宅は非公開です。町並み散歩の際には、住民の方のプライバシーに十分配慮していただくようお願いします。

足助の町並みは、木造住宅が密集しています。町並み散歩の際には歩きながらのおタバコはご遠慮いただきますようお願いいたします。

発行者

豊田市教育委員会 教育行政部 文化財課 足助分室
愛知県豊田市足助町宮ノ後26-2 足助支所内
TEL:0565-62-0609 FAX:0565-62-0606
E-mail: bunkazai-asukebunshitsu@city.toyota.aichi.jp

平入や妻入が混在する町並み

街道沿いに平入や妻入の町家が混在する変化のある景観は、足助の町並みの特徴です。

敷地の規模や形状の関係から、間口が5間以下で敷地の奥行きが深い場合に妻入形式となる傾向が見られます。また、商業地としての需要が高まる中で、土蔵などを居宅や店舗に転用したとみられるものもあります。

足助の町家は、2階のちがいが高い平入2階建て形式が主流で、白漆喰で仕上げられた外壁とあいまって、重厚な景観をつくり出しています。豪壮な小屋組みは地域の豊富な木材と工匠の技術に基づくものです。



●深見家住宅とマンリン書店

しころ 鍛葺き形式の主屋

上屋根と下屋根にわずかに段差をつけた鍛葺き形式の軒高の低い主屋が残されています。これらは安永4年(1775)の大火前の建物形式を伝える可能性が高いと考えられます。



●旧紙屋鈴木家住宅

川沿いの石垣・石組み階段と家並み

足助川沿いでは、幕末から近代にかけて川岸に石垣を築き、川に張り出すように座敷などが建てられました。石組み階段とともに、川との繋がりを映した景観をつくり出しています。



●真弓橋から見る川沿いの風景

街道脇の小路

敷地境界いっばいに土蔵や石垣が迫るように建ち、通りの向こうには山々を望む街道脇の小路は、街道沿いとは異なる通り空間を形成しています。漆喰塗籠の壁や下見板の仕上げに歴史が感じられます。



●マンリン小路

●馬頭観音
◆大正11年(1922)
●芭蕉句碑
◆慶応3年(1867)

三面八臂の優美な坐像で、傍らには、「牛馬搦待水」と彫られた水飲み場がある。馬頭観音の背後には、幕末の足助を代表する俳人・文化人であった板倉塞馬が建立した芭蕉句碑もある。



●足助商工会
◆明治19年(1886)

昭和33年まで足助警察署として使用されていた。



●普光寺

本堂は、大火以前の享保12年(1727)の建立。屋根は茅葺きであることから、大火以前の町家は茅葺きや板葺きの屋根が中心であったことがうかがえる。



●田口家住宅
◆江戸末期以前

平入2階建ての主屋の背後に4棟の蔵が連なり、街道沿いから裏通りまでの屋敷構えを良好に維持している。



●宗恩寺

現在の本堂は、文政12年(1829)の再建。明治44年(1911)建立の鐘楼は、足助八景のひとつとして親しまれ、高台にある境内からは足助の町並みを一望することができる。



●慶安寺

慶安寺は、慶安元年(1648)に現在の地に建立された。山門は大火以前の安永2年(1773)に建てられたもので、大火の類焼範囲を知る手がかりとされている。



●太田家住宅(三嶋館)
◆天保頃(1830~43)

当初は呉服屋で、明治初期からは旅館を営んでいた。



●小出家住宅
◆安永4年(1775)以前

酒造や味噌の醸造のほかに三河湾岸の新田開発も行った足助を代表する大商家。足助の町並みの特徴的な短冊状の敷地割と異なり、間口の広い斜面地に建物群が建てられている。



モデルコース

- ◆おすすめコース (30分)
常夜灯→道標→中橋→マンリン小路→加東家→エビヤ小路→足助川沿い→飯盛橋→常夜灯
- ◆伊那街道コース (20分)
常夜灯→道標→飯盛橋→マンリン小路→馬頭観音→落合橋→常夜灯
- ◆よくばり散歩コース (60分)
常夜灯→道標→中橋→加東家→慶安寺→宗恩寺→普光寺→馬頭観音→落合橋→常夜灯
- ◆足助川と街道コース (90分)
常夜灯→落合橋→馬頭観音→マンリン小路→加東家→足助中馬館→苺屋→新道→旧道→小出家住宅→足助川沿い→中橋→塩の道づれ家→常夜灯



●白久商店
◆文化12年(1815)

もとは呉服太物商店。足助川側からはなまこ壁仕上げの土蔵を見ることができる。



●苺屋 ◆江戸後期

幕末から明治期にかけて、足助に13軒あった塩問屋の中心的存在として栄えた。街道沿いに妻入2階建ての主屋と平入2階建ての塩座が建ち並び、足助川側の石垣の上に離れ座敷や土蔵が建つ姿は、足助の町並みの特徴をよく表している。主屋・塩座・土蔵・離れ座敷は、市指定有形民俗文化財。



●加東家 ◆文化元年(1804)

江戸後期に酒造業、大正期から昭和初期には質屋が営まれていた。西側の座敷の床柱に残る刀傷は、天保7年(1836)の加茂一揆による打ち壊しの際のものといわれている。



●足助中馬館(旧稲橋銀行足助支店)
◆大正元年(1912)

稲橋銀行足助支店として建造された。住民の熱意によって保存・活用されることになり、昭和57年に足助中馬館として開館した。商業・金融・交通・町並みなどの資料を展示し、一般公開されている。県指定有形文化財(建造物)。



●旧紙屋鈴木家住宅
◆安永5年(1776)

当初は紙を扱う商家であったと考えられ、その後、醸造業、金融業、新田開発なども手がけた足助を代表する大商家。大火翌年に建てられた主屋は鍛葺き一部2階建てで、その後、江戸時代後期から近代にかけて建てられた建物がそのまま残り、近世の最上層の商家の屋敷構えを今に伝えている。



●玉田屋 ◆江戸末期

当初の屋根は切妻であったが、後の改造により前面が入母屋、背面が切妻という個性的な造りとなった。建築当初より現在まで、旅館として旅人を迎え入れている。



●道標 ◆弘化2年(1845)

伊那街道と鳳来寺街道の分岐点に建てられ、「右ほうらいじ道 左ぜんこうじ道」と刻まれている。



●両口屋
◆文化文政期(1804~29)頃

大正期頃まで蕎麦問屋を営み、戦後に学校給食のパン製造を手がけていた。主屋は、足助では珍しい入母屋平入2階建て。



香嵐溪